

## 平成 26 年度第 1 回「放課後等の遊び場づくり事業推進委員会」議事録

1. 開催日時 平成 26 年 7 月 7 日（月）10：00～12：00

2. 開催場所 福岡市役所 15 階 第 5 会議室

### 3. 出席者

山下委員長，横山副委員長，古賀委員，原口委員，山浦委員，守田委員，宇都宮委員  
放課後子ども育成課青少年育成コーディネーター4名，事務局

### 4. 議題

(1) 副委員長の決定

(2) 放課後等の遊び場づくり事業「わいわい広場」の運営状況（資料 2, 3）

- ① 統計（平成 26 年 3 月末現在）
- ② 青少年育成コーディネーターからの報告

(3) 人材育成について（資料 4, 5）

- ① プレイワーカー育成事業
- ② わいわい先生（現場責任者）研修
- ③ 補助員研修
- ④ プレイワーカー研修

(4) わいわい広場の課題について（資料 6）

(5) 保護者アンケートについて（資料 7）

### 【参考資料】

「放課後等の遊び場づくり事業推進委員会」設置要項  
「放課後等の遊び場づくり事業推進委員会」名簿

## 平成 26 年度第 1 回「放課後等の遊び場づくり事業推進委員会」議事概要

### 1. 開会

○課長

冒頭挨拶

### 2. 委員紹介

### 3. 議事

#### (1) 副委員長の選任について

○委員長

設置要綱に基づき、副委員長に横山委員を推薦。承認。

#### (2) 放課後等の遊び場づくり事業「わいわい広場」の運営状況について

① 統計（平成 26 年 3 月末現在）

② 青少年育成コーディネーターからの報告

（事務局より，資料により説明）

○青少年育成コーディネーター

わいわい広場の巡回に行くと、わいわい先生が子どもの名前を呼びながら「久しぶりね、今日は参加すると？」と楽しそうな様子が見られる現場と、事務的な対応をする現場とに分かれている様子が伺える。

運営協議会においても、わいわい先生の方から学校に積極的に働きかけができていない現場がある。例えば、運営協議会で学校側の校長や教頭から質問が出されることがあり、事前にわいわい先生が学校と準備資料について打ち合わせをしていないことが分かる。わいわい先生の姿勢の差が見られる。

○青少年育成コーディネーター

現在早良区では、24 校区中 14 校が開設されており、半分以上の開設となっており、良好に運営されている。

わいわい先生は一人で現場にいるため、どうしても自分の現場しか見えていないことが多い。しかし、早良区では年に 2～3 回の全体交流会があり、受託業者が違ってもわいわい先生が顔見知りになっていて、お互いの良いところを吸収しながら、積極的に取り組む姿が見られるようになってきた。

例えば、積極的に児童の心理を理解しようというわいわい先生が出てきている。子どもの気持ちや状況を考え、わいわい広場で帰りの会をなくすことでスムーズな流れをつくっているわいわい先生もいる。

企画事業では、他校のわいわい先生が手伝いに来ているところもある。この点については、運営業務受託者内の連携がどれだけ取れているかが大きい。

課題として、見守りサポーターの減少があげられる。登録児童数の半分が登録している現

場もあれば、1～2割程度の登録の現場もある。見守りサポーターの登録数を増やす取り組みとして、地域で行われる諸会議に参加して呼びかけたり、毎月発行されるわいわいだよりを全児童に配布したりする現場もある。わいわい広場の意義や遊びの効用が保護者等に広がることで、実際に登録児童数が増えた現場もある。

#### ○青少年育成コーディネーター

わいわい先生は、責任を持って業務を遂行している。補助員や見守りサポーターに声を掛けながら、スタッフ一体となって、子どもが安心して遊べる環境をつくりだしている。

ケガの対応についても、手当や状況の確認、保護者への連絡も迅速かつ適切に行っていると感じている。ただ、わいわい先生の中には、学校への迷惑をかけないようにという意識が強い方もおられるが、もっと学校への働きかけが必要と感じることもある。学校から支援をいただくためにも、わいわい広場を知ってもらうことが大事である。一部の学校では、わいわい広場事務室が職員室から離れていて、日常的にコミュニケーションが取れにくい学校もある。人間関係ができていれば、わいわい広場参加児童のことをクラス担任に相談することもできる。

見守りサポーターの登録減少で悩む現場もあれば、地域からの協力がある現場もある。地域を巻き込んでいく運営が求められている。運営協議会ではメンバーの入れ替わり等でわいわい広場をあまり知らない方もおられるので、学校・地域の集まり等で、わいわい広場の説明やPR等が必要と感じている。ある学校では、学校のホームページでわいわい広場について取り上げてもらっている。

#### ○青少年育成コーディネーター

運営協議会では、わいわい広場の安全・安心を求められることが多い。わいわい広場に参加した児童の下校対策として、地域の方に下校時の見守りを行っていただいているところもある。

授業参観日にわいわい広場が開催されると、保護者も助かっている様子が伺える。

わいわい広場と留守家庭子ども会では遊びのルールが違うところもあるので、注意が必要なことがある。危ないため、ジャングルジムや水遊びを禁止している留守家庭子ども会もあるようだ。遊びの効用について、共通理解が求められているのではないかと。

#### ○青少年育成コーディネーター

実施校の中には、5,6年生の参加児童が多く、低学年の面倒を見てくれている現場もある。また、PTA会長が、17時からのサッカークラブに参加する児童をわいわい広場に取り込んでいる学校もある。校庭開放指導員が補助員を兼務することで、うまく連携ができている現場もある。

危機管理については定着してきたようだが、より具体的な対応を考えてほしいという現場もある。運営協議会において、危機管理について学校から質問が出ることがあるが、各学校に応じた具体的なものとなると、学校とも連携しながら、その対処方法は事業者が検討すべきではないだろうか。

#### ○委員長

わいわい先生の育成について、以前は心配な面が多かったが、今は質が向上していることが伺える。地域、PTA、保護者、留守家庭子ども会、学校との連携について整理して話していただいたので、よく理解することができた。わいわい広場の課題については後程議論して

いきたいと考えるが、今の報告について何か質問はありませんか。

○委員長

質問はないようなので、運営状況の報告を終わります。

### (3) 人材育成について(資料4, 5)

- ① プレイワーカー育成事業
  - ② わいわい先生(現場責任者)研修
  - ③ 補助員研修
  - ④ プレイワーカー研修
- (事務局より、資料により説明)

○委員長

今の報告について、わいわい先生研修などに携わった副委員長、委員より補足説明・意見等あればお願いできないでしょうか。

○副委員長

わいわい先生研修に講師として関わって感じたことだが、関係者の研修が計画的に行われており、レベルが高いと感じている。全体としてうまくいっている印象がある。子どもたちの成長や、わいわい広場の運営に関係者がうまく関わっていくための研修がなされている。

○委員

研修の講師として携わるときは、この事業が人を育てる事業であることを理解していただくため、どうやって進めるか、主体的に関わる姿勢を持っていけるのか、遊びを増やすのではなく子どもを豊かに育むという視点でプログラムを組んでいる。少しずつ遊びについての基本的な共通の価値が、わいわい先生に広がっていると思う。

研修は事業者も行っているが、どのようなレベルの研修を実施しているのかわからなかったことから、昨年度より基本的な研修は市で実施することになった。それにより、わいわい先生が共通理解を持ちながら、関わるできるようになったのではないかと。

○委員長

私も関わっているのわかるが、昨年度から市が人材育成に力を入れていることは理解している。1~2年前は、わいわい広場の意義を理解している人が少なかったり、スキルが足りない人もいた。そして付け焼刃的に研修を行っている様子が伺えた。今年度は、枠組み、フレームが計画的に組まれているようである。通常、わいわい先生は他の現場も見れないし、孤立しがちであるが、研修のワークショップなどにより、他の現場の取り組みもわかり、わいわい先生自身がたくましくなっていると思う。

○副委員長

事業者主催の研修について説明をいただきたい。

○事務局

事業者は毎月1回定例的に集まり、意見交換を行ったり研修を行ったりしている。以前事業者より、新任わいわい先生研修で実施された児童心理と理解等についての研修を行いたい旨問い合わせがあり、そのときに講師として委員長を紹介した。今後も事業者研修を継続し

ていくよう働きかけるとともに、必要に応じてアドバイス等の支援を行っていきたいと考えている。

○委員長

ほかの委員から質問はないか。

○委員長

なければ、先に進めていきたい。

#### (4) わいわい広場の課題について（資料6）

（事務局より、資料により説明）

○委員長

わいわい広場は、成果はもちろんあるが、課題もある。本日は、事務局で考えている課題について、一つに絞るといっても全体を説明をしてもらった。この課題の資料に付け加えるべき課題はないだろうか。そして全部を一気に解決することは難しいと感じているため、優先順位をつけられないかと考えている。

例えば、わいわい先生の質は向上してきているが、まだ足りない部分もある。青少年育成コーディネーターの話では、子どもというより学校、地域、保護者、運営協議会の委員といった大人との関わり方について課題があるように感じた。また、わいわい先生の業務に対する姿勢にも違いがある。自分の学校しか見えないという課題もある。この解決策として、交流会があったり、研修でのワークショップがあったり、実地研修があったりしている。

また、地域型はスムーズなのだろうか。スムーズであれば、コツを教えてほしい。

また、見守りサポーターの登録が減少している話は、これまで何度も出てきた。どうやったら見守りサポーターが増えていくのか、地域支援も含めて考えていくべきではないだろうか。

また、遊びについての共通理解は、学校、留守家庭子ども会、わいわい広場の足並みがそろっていないように感じる。

ほかの委員からそれぞれの立場で、付け加えるべき課題や優先度の高いもの等について意見をいただきたい。

○委員

私が携わっている現場では、留守家庭子ども会指導員が代わると、遊びのルールが変わってしまった。留守家庭子ども会で禁止されている遊びは、わいわい広場でもしないほしいとの要望があったものである。結果的に、留守家庭子ども会の子どもの外で遊ぶ16時までは留守家庭子ども会のルールに合わせ、留守家庭子ども会の子どもの入室が16時以降は、わいわい広場の子どもは自由に遊ぶというルールに変更している。

遊びの普及・啓発については、私たちも保護者への働きかけを行っていきたいと考えている。

○委員

私が携わっている現場では、留守家庭子ども会と、遊びのルールについて問題になったことはない。シャボン玉遊びや、水遊びをしたりしている。プレイヤーが来た時も、留守家庭子ども会の子どものと一緒に遊んでいるが、トラブルになったことはない。

また、自治協議会長は新しく着任されたので、今度青少年コーディネーターと説明に行く

予定にしている。

#### ○委員長

自治協議会長の交代の話も出たが、人材が入れ替わったときのスムーズな対応が重要である。私が携わっているきんしゃいキャンパスでも、地域との顔つなぎを心がけており、地域の行事や集いに積極的に参加するようにしている。

#### ○副委員長

わいわい先生の研修なども大切だが、その前にもっと大切なのは教育委員会との連携である。以前事務局の協力により、福岡市教育長と話をする場を設けていただいた。よく学び、よく遊ぶことで、学校教育も良い方向に進むことを教育委員会の関係者にも理解していただく必要がある。

引きこもり、いじめ、不登校は人間関係の問題であり、引きこもりが全国で70万人と言われている中、遊びから育まれる主体性や協調性などは、学校教育や子どもの育ちの前提となるものである。全市の先生方が理解するべきであり、遊びの意義等についての研修を必修としてもいいのではないか。わいわい広場が、こども未来局だけの取り組みになってしまっている。

また、厳しい財政状況の中、全校区展開を目指しているようだが、議会から成果が見えないと言われかねない。子どもの学習面の伸びにも効果があること、教育委員会と連携していくことが大切である。そうしなければ、実施校の拡大は難しいのではないか。こども未来局だけが頑張っても、教育委員会が理解していないのなら、大切さが伝わっていかず長期的展望は開けないのではないか。

質問だが、全校区展開をすると、予算の総額はいくら程度になるのか。また、補助員と見守りサポーターの謝礼金はそれぞれどれくらいか。

#### ○事務局

平成26年度予算はおよそ2億2,600万円。全校区展開だと、およそ3.9億円程度が見込まれる。補助員は1時間あたり800円を謝礼金として支払い、プレイワーカーは月2回程度、1時間あたり1,480円の謝礼金を支払っている。見守りサポーターは無償のボランティアとして携わってもらっている。

#### ○副委員長

福岡県にもアンビシャス広場という似たような事業が実施されているが、福岡県議会から成果とは何かと問われている。私は子どもが元気に遊べばそれが成果であり、人と関わりながら、たくましく育ってくればいいと思っているが、行政としての成果が問われてくるのではないか。そういった問は、遊びに対する理解がないため出てくるのだが、今後は遊びが教育とどう関係しているのか、子どもの健全育成にどのような効果があるのか理論化していくことが、大きな課題と思う。

宗像市では、ある学校で授業中にイライラする子どもが多かったため、緊張とリフレッシュのバランスをとる必要があると考え、昼休みの時間を活用して学校の中での遊びの活性化を図ることにした。その際、先生になるための勉強をしていた学生に、プレイワーカーとして入ってもらい、子どもが外で遊ぶようにするための触媒として活動してもらったところ、しばらくすると子どもがみんな外で遊ぶようになって、授業中も子どもたちは落ち着いて勉強するようになった。先生や保護者からも、いい取組をしてくれたと好評だった。ただ、車

などの交通手段のない学生が授業の合間の昼休みに参加するため、保護者が交代で送迎をしていたのだが、事故が起こったらどうするのかという声上がり、送迎ができなくなってしまい、その結果学生の参加も減り、こじんまりとした活動となってしまった。この事例からも、取り組みの効果や遊びの重要性について、先生や保護者の方に理解を深めていただくことが重要である。

○委員長

遊びと教育の関係性について理論化していくべきとの意見である。教育委員会との連携についてどのような取り組みを行っているのか。

○事務局

持ち時間は少なかったが、校長会でわいわい広場の資料を配布するとともに、わいわい広場の意義等の説明を行った。

○委員長

遊びに特化した事業を行政が行っているという点では、全国初かもしれない事業であり、長期的展望は大切なところだと感じている。

わいわい先生が地域の会合等に参加してわいわい広場の意義等を説明していくべきとの意見も出ていたが、そこまではできないと負担に感じるわいわい先生もいるのではないかと。普及、啓発も含めて、教育委員会との連携はどうか。

○委員

未実施校に働きかけ、全校区展開をめざすことについては行政の管轄であるが、すでに開設している学校については、校長がわいわい広場を学校経営としてどのように考えるのかというのが大きい。先ほどハード面として、事務室の場所が職員室や校庭から遠いことや見えにくいことに対して意見が出ていたが、教室の配置等物理的に考えてダメな学校もある。それよりも、ソフト面として、わいわい先生と学校との普段からの交流が重要と考える。平尾小学校ではわいわい先生が玄関から入って、校長にあいさつしてからわいわい広場事務室に行っている。わいわい先生は子どもとのコミュニケーションはもちろん、大人とのコミュニケーションをとる能力も大切である。人との良好な関係性の入り口はあいさつ。雨の日の開催場所等についても、来てすぐの挨拶があれば相談しやすい雰囲気生まれるものである。

また、参観日に合わせてわいわい広場を開催することは有効だと思う。保護者懇談のときに、子どもたちは外で遊んでいる。わいわい広場を開催していれば、楽しいと感じた子どもが自ら入りたいと思うのではないかと。

子どもが、留守家庭子ども会、わいわい広場、どこに所属しようとも同じ学校の子どもである。固定遊具等の使い方にしても、ルールを見える化することが大切である。学校のホームページに遊びのルールについて掲載すれば、保護者等とも共有を図ることができる。遊びのルールが浸透していけば、子どもたちの中でも遊び方が違ったら、お互いに注意し合えるようになるもの。私たち校長がコーディネートできる範囲のことだと思う。

また、台風が来た時などの緊急連絡網にわいわい広場も入れてはどうかと思案している。学校経営とわいわい広場は別ではあるが、サービスとして必要ではないかと思う。

また、開設校を広げることは校長の仕事ではないが、わいわい広場を開設したからには、わいわい広場の中ではこんないいことが行われているという情報を発信していくことは必要である。中央区の校長会でも、わいわい広場についての情報交流の場を設置していくよう

提案していきたいと考えている。

○委員長

コミュニケーションの必要性から始まった意見だが、参観日の開催等、具体的なアイデアがあった。このアイデアは、自然とわいわい広場の普及・啓発にもつながっていくものなのかもしれない。

○委員

わいわい先生が一人というのは大変なのかもしれない。地域型では、スタッフみんなで対処しているので心強い。

学校のホームページでは、当初はわいわい広場について掲載してもらっていたが、ホームページに詳しい先生が異動されてからは、更新されなくなった。

○委員

わいわい先生の力量にもよるが、校長や学校の先生の理解も様々である。また、わいわい先生が退職されたり、事業者の担当者が代わったりすることもある。

そのような場合でも、遊びが子どもの育ちになくはならないものという考えがぶれなければ、この事業は推進されていくのではないか。青少年育成コーディネーターも2年程度で代われ大変であるが、校長や運営協議会の委員が交代した際にはお力を貸していただき、わいわい先生と連携をとることが大切である。

○青少年育成コーディネーター

青少年育成コーディネーターは、年度当初すべての実施校へ挨拶まわりを行っているところである。特に新しく校長に赴任された学校には、わいわい広場のパンフレットを持って行って挨拶をしている。

○副委員長

以前、アンビシャス広場は、西日本新聞に記事を連載してもらった。PRとして、マスコミに取り上げてもらうよう少し働きかけてはどうか。記者の目から見て、子どもの遊ぶ姿を見てもらうこともまた大切なことである。

○委員

同じ放課後こども育成課の事業であるが、留守家庭子ども会の指導員の理解度も違う。そのような中、先日行われた留守家庭子ども会指導員の研修では、子どもの育ちについて説明し、子どもの現状について緊迫感のある数値を見てもらった後に、グループで話し合ってもらった。ケガはダメだと言われることもある中、子どもがケガを通して身につけることの意義も感じてもらえたと思っている。

○副委員長

わいわい広場のパンフレットは、よくまとめられていてわかりやすい。関係者がしっかり読んで理解することが大切である。

○事務局

わいわい広場のパンフレットは、各現場に配布済みであり非常に好評で、追加送付の依頼もあっている。運営協議会等での説明・配布、企画事業に参加した保護者等への説明・配布に活用するようお願いしている。委員の協力も得て作成しており、本事業の味方になってもらう大人を増やしていくために活用していきたい。

○委員



今年実施した保護者アンケートの中に、勉強への取り組み方の変化等についての項目がなかった。「宿題をするようになった」「早く寝るようになって嬉しい」等、保護者が成果として感じるような項目を入れれば、わいわい広場の意義等を理解しやすいポイントになるのではないか。

パンフレットだが、来年度の新生へ説明会で配布を行う予定にしており、地域関係者への説明にも使用しているところである。

#### ○委員

現場を回っていると、いろいろとわかることがある。例えば、年度初めに青少年育成コーディネーターと一緒に校長、教頭等に挨拶を行うことは、現場では好評のようである。校長や教頭があいさつをしてくれることが増えたという現場もある。

青少年育成コーディネーターが7区の現場を回ることは大変で、特にバスしか使えない状況だと、さらに大変なことだと思う。必ずしも現場に回れないときは、青少年育成コーディネーターから定期的に電話することで、わいわい先生が心強く感じたという話も聞く。悩んでいたことが、うまく解決することもあったという。全実施校区を巡回するのは大変だが、電話一つで助かる現場も多いようである。

また、現場では補助員や見守りサポーターとの連携等について、悩んでいるところもある。今までは区単位での研修を行っているが、校区単位での研修を取り入れてはどうかとの要望もある。

#### ○委員

青少年育成コーディネーターの努力には頭が下がるが、それでも現場校長がわいわい広場を知らない校長も多いので、実施校を拡大していくことが難しいのではないか。現場のことは実施校の校長が知っているので、実施校の校長が「いいよ」と言えば、未実施校の校長も「いいね」と思ってもらえるのかもしれない。

校長に迷惑はかけられないと思っているかもしれないが、そもそも学校の運営業務に迷惑をかけないというのは、無理な話である。どんな迷惑がかかるかわからないが、実施をしていいことがあるというのは、現場の校長だから伝えることができるのではないかと思う。

また、見守りサポーターについては、地域に立ち上がった父親の会に働きかけていく予定だ。

#### ○委員

次のわいわい広場のアンケート調査としては、宿題の取り組み方の変化、早く寝ることへの変化についても入れてほしい。今回のアンケート調査ではテレビを見る時間が減っていることや、携帯等の電子機器の使用時間が減少していること、また身体を使った遊びが増えているとの結果が出ている。アピール材料をピックアップして資料をつくってもいいのではないか。ぜひアンケート結果を有効活用してほしい。

#### ○委員

わいわい広場のPRについては、市政だより等で各わいわい広場について順番に載せるなどしてはどうか。

私が携わっている現場においては、わいわい広場に参加した児童が帰る時の工夫について、地域の子ども育成連合会等にも協力を依頼できればと考えている。

#### ○委員

様々な社会問題がある中、学校教育と遊びをつなげることは大切なこと。今、教員は確実に子どもと触れ合う時間が少なくなっている。遊びを通して、子どもはケンカをしてもうまく折り合うことを覚えたり、自己主張をするけど相手の言うことも聞くといったことが培われていく。例えば、遊びの経験が乏しいことで、トラブルを起こしやすくなり、解決できないときは、キレてしまう。また、ケガや骨折することが増えると言われることもある。遊びの効用や遊びの良さについて、きっちりと押さえてPRしていくことが大切である。

○青少年育成コーディネーター

先日、テレビの中で、東京医科大学のドクターが言っていたが、最近骨折が多いと言われているが、その原因の一つには外遊びをしないからということ言われていた。カルシウムだけを取っても骨は強くならず、ビタミンD等が必要で、そのためには外遊びが必要とのことだった。外遊びをすることで、ビタミンDが生まれ、骨が作られるということだった。

○委員長

様々な意見をいただいたが、時間のこともあり、次に、事務局より今年1月に実施したアンケートについて説明をお願いしたい。

(5) 保護者アンケートについて (資料7)

(事務局より説明)

○事務局

委員よりアンケートについてアドバイスを受けたので、今後わかりやすく整理していくとともに、次回のアンケート調査の項目の取り入れについても検討していきたい。

○委員長

本日の委員会で、わいわい広場、そして遊びと教育・学習についての連携やつながりも見えてきたのではないかと。それらについて理論を構築し、わいわい広場の充実につなげていってほしい。

また、わいわい先生と学校の連携は、まず日々あいさつをしっかりと行い、積み重ねていくことで、作りあげられていくものとわかった。わいわい広場のPRや遊びの普及・啓発についても、企画事業やパンフレットを使いながら、また市政だよりや新聞を活用しながら行っていくべきだとの意見も出た。

わいわい広場に関する人材の入れ替わりについても、引継ぎをしっかりと、理解者を増やすチャンスとして生かしていくべきではないだろうか。

様々な課題についてオープンに議論されたが、これを整理・共有し、今後柔軟に対応していくことが大切だと思う。

○委員

わいわい広場のパンフレットについては、早速学校のホームページで紹介していきたい。

○委員長

時間が来たため、平成26年度第1回「放課後等の遊び場づくり事業推進委員会」は閉会としたい。